



学校だより

令和5年 5月31日

横浜市立榎が丘小学校

～豊かにかかわり合い、しっかり学ぶ、心身ともに健やかなえのきの子～

TEL 045(983)1067 FAX 045(983)5284

HPアドレス <http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/enokigaoka/>



あらたふと青葉若葉の日の光

副校長 澤 勉

雨に洗われた木々の葉が、まぶしい季節となりました。大きなクレーンが撤去され見通しの良くなった校庭の先には、様々な緑が美しいコントラストを映し出しています。職員室の窓から見られる木々の姿は、まるで一幅の掛け軸のようです。

さて、一言で「緑」と表してしまいましたが、「日本の伝統色」というカラーチャートでは「緑」のカテゴリの中に、実に八十二種もの名前が記載されております。その中には「若草色」や「萌黄色」といったよく聞く名前だけでなく、真鴨の頭の羽色に由来する「鴨の羽色」や江戸後期の歌舞伎役者が好んだ「市紅茶(しこうちゃ)」など、ユニークなものもあります。なぜこんなにも多くの名前があるのでしょうか。

実は「赤い」「青い」など、色名に直接「～い」とつけて形容詞として使われることができる色名は、「赤、青、黒、白」の四色のみです。また、これらは「赤鬼⇄青鬼」「赤白帽」「白黒はつきりする」などと反対語として使われたり、「赤々と」などの副詞で使われたりもしています。しかし、この四色以外はこのような使われ方がされないことから、どうやら古代日本語で使われていた色名はこの四色だという説があるそうです。「青りんご」や「青信号」などの使われ方も、これに基づいたものともいわれています。

しかし、古墳時代から平安時代にかけて染色技術が発展してきたころから、少しずつ色の名前が増えてきたようです。確かに冠位十二階から始まる冠や服装は色により位を示したり、清少納言は枕草子の中で夜明けの様子を「紫だちたる」と表現したりしています。ちなみにこの頃の染料は鉱物や植物由来のもので、朱や紫はその代表ともいえます。

その後、染色技術の発達により反物などの色合いも飛躍的に増え、細かなニュアンスを区別する必要性が生まれました。その結果、「柚葉色」や「山葵色」など、身近な植物の名前などをそのまま使った色名が多くなったと考えられます。そんなことを思いながらもう一度窓の外を見ると、実に様々で豊かな色に包まれている学校だということを再認識します。

このように多くの木々に囲まれた榎が丘小学校ですが、校名にある「榎」も、しっかりと根を張り枝を広げる、堂々たる樹木です。地域の中でしっかりと根を張り、子どもたち一人ひとりを大切に、健やかに育てるよう、教職員一同、力を合わせて教育活動を進めてまいります。今年になり、地域に出ていく活動も多くなります。ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ぜひあたたかなお声をかけていただき、榎が丘小学校の子どもたちの成長を見守っていただきますよう、よろしく願いいたします。

※タイトルは、芭蕉が日光東照宮で詠んだとされる句です。